

「旅」に帰る

鈴木京子

五月、トオルさんちの田植えから帰って、風呂に入ろうと服を脱ぐと、左の乳房が真っ赤だった。二、三日のうちにブツブツができ、ジリジリと痛み出し、上半身が浮腫んで、左腕が上がらなくなつた。田植えはまだ二週間ほど残っていたが、ここで農業労働者を廃業した。

六年前（二〇一〇年）に小さなしこりを感じたが、いろいろ調べ、考え抜いた末に、そのまま暮らすことを選択した。ギリギリまで自活したあとは、痛みや苦痛の緩和に最大限のことをしながら寿命を受け入れようと思った。三十代から四十代の十年間とその体力を、農村での労働に思い切り費やせたことは本当に幸せで、自分の選んだ癌との向き合い方に悔いはない。その機会を与えてくださった、この町のみなさんにはただただ感謝するばかりだ。

ただ、最後は「ただの田舎娘」から「私」という人間をつくった人たちが多く暮らす首都圏で、つれあいや友人たちに感謝しながら過ごしたいと思ひ、この町を離れることにした。



夏雲の鳥海山

この辺りでは、生まれ育った家を出て暮らしている人を、「旅に行った人」と表現する。東京で何年か働いた後に地元に戻った人は「旅から帰った人」になる。「だから、オメエは、旅から来た人だ」と、この言葉を教えてくれた人は私に言った。

旅から来た人——自分を定義するためのこの言葉が、私はとても気に入った。どこに行っても、私は、自分を「旅から来た人」と呼んで、しっかり生きたいと思った。だから、また新しい旅に出る。



最後の梅干し



灯油タンクにさえ暮らしの軌跡

Photo : Suzuki Kyoko